

本書の百年を経ての出会いは先人の手引きのようである。鹿田分館や東大図書館、他大学医学部図書館にも大変お世話になり、復刻事業も進行し、近代的な製本技術と出版使命に献身されたKKコンテンツの尽力により、約六ヶ月という驚異的な短期に終了し、復刻完本の新生振りや、広島医学会総会場に展示し会員にも手にとってみて貰い、中国新聞も大きく報道し、地域の史家にも反響があった。展示の説明文は次のように書かれ、出版は総会に間に合ったのである。

『芸備医事』再生の言葉は次のようである。

広島医学百年を迎えて

名著・芸備医事復版再生なる

明治二十九年創刊より昭和十七年終刊に至る迄五五五号を今年医学会総会に展示供覧し得たことは先人の学恩に些かなりとも報いようとする我々後進の素志であり感激新なるものがある。本記念事業推進援助された各位・富士川游顕彰会・広島県医師会・安佐医師会などで多くの方々の協力を得て、永らく幻であった郷土・本邦の名著を永久版完本として後世に伝えようとするものである。本書は郷土の秀れた文化遺産として広島県立文書館に保管され、貴重な医事文化資料として活用されることを念願するものである。

平成九年十一月八日

索引号・追補 月刊『芸備医事』は今回初めて全号製本されたので、元来本書全号を通しての索引も、一本として発行

ということになる。約一九〇〇頁の内容に論説・伝記・史談・医戒・学苑を中心として、医学史関係の外に、雑報は医学会のみならず各地・各界・各支部・会員動静報告があり、医学界の連帯感が強調されている。ドイツ医学の紹介・郷土通信などは史家の興味をひくに足る編集となっている。その中の一項目を探し出すにしても索引は原則的に編集が必要となってくる。このたびは全号を通して、人物・物件別に分類し発行できず、全号の目次の羅列に終ったことは心残りであるが、後日の作業に期待しななければならない。

(江川 義雄)

(芸備医学会発行、索引号は富士川游顕彰会発行・申し込み先、コンテンツKK・岡山市西崎一〇一、電話〇八六一二五五―七八四八、平成九年十一月、A3判、一九、〇〇〇頁、二部一セット頒価税込み九六七、〇五〇円)

志田信男 訳注

『アヴィセンナ 医学の歌』

アラブ医学史のわが国における文献は、通史としては前嶋信次先生の著書、小川政修、川喜田愛郎両先生の西洋医学史中の記述など、高いレベルのものに接することができた。しかし個別史の領域では公刊されたものが少ないので、アラブ医学史の最高峰アヴィセンナ(この表記につき後述)の代表作の一つが翻訳されたことは誠に喜ばしい。しかも綿密なテキスト・クリティークの上に立った高度に学問的な翻訳で、詳し

い解説もつけられている。アラブ医学史、西洋医学史に関心を持つものの必読の文献として、この書を紹介する。

訳者志田信男氏は東京薬科大学名誉教授で言語学、西洋古典学を専門とし、早くから古代・中世の医学史も研究対象としていた。この書の「あとがき」によると、アビセンナの『医学の歌』を神田の古書店で発見し、これを底本として翻訳したという。この底本は、アラビア語原典にフランス語訳を付し、ラテン語訳もつけられた精密なもので、訳者はこの書を訳するのにアラビア語まで学習している。訳者は後に英訳も入手し、それも校訂の参考とした。この訳業は訳者の個人雑誌「伝承と医学」に連載されたが、今回解説を付して出版された。

現ウズベキスタンのブハラ近郊で生まれ、現イラン西部のハマダンで死去したアビセンナ、イブン・スィーナについて、この書に詳しい解説がある。アビセンナは偉大な医学者であるだけでなく、科学・思想の多くの方面に業績を残した偉人であった。アビセンナは蕩児としての一面ももっていたが、訳者はそれに対する目配りも忘れていない。

アビセンナの主著は『医学規典』（カーヌーンまたはカノン、私は略称としてアラビア語カーヌーンを用いることを提唱したい）で、長い間西洋医学の基準となった。『医学規典』を要約したのが『医学の歌』（『医学詩』とも訳される）で、多くの人に愛読され、教科書としても用いられた。

その内容は、(1) 散文による序文、(2) 詩による序文、

医学の定義と分類、自然の七個の構成要素、生命に対する六個の必須要件、常態から逸脱する事柄（病理学）、微候論、経過論などの医学の基本理論、(3) 臨床医学の内科的方面の(a) 食事療法と薬物による健康法、(b) 食事療法と薬物による治療学、外科的臨床の(a) 血管と瀉血、(b) 軟部組織の処置、(c) 骨、とくに骨折の治療で、総行数一三二六行である。

訳者もものべているように、韻文による啓蒙的な医学書というだけでも思いうかべるのが『サレルノ養生訓』であろう。このような形の医学書、いわゆる医学教訓詩は古くからあったようで、小川政修先生は晩期ローマやビザンツの医学者にもこのような著書があったことを書いている。

訳者は『医学の歌』を、原文、仏訳、ラテン語訳、英訳を比較するという徹密な方法で翻訳しており、注も原注、英注、訳注を併記している。原注には、この書を注釈したアペロエス、イブン・ルシュドのものもある。

解説は、アビセンナの生涯、業績、医学理論、『医学の歌』の歴史などを含んだ詳細なもので、これだけで「アビセンナ読本」となっている。アビセンナには高弟が後半生を加筆した自伝があるが、その全訳も掲載されている。この高度に学問的な翻訳と解説を、研究者必携の文献として推奨する。

二、三を追記する。

訳者は Avicenna の読みを音声学的に詳しく考察し、アヴィセンナと表記している。私もこれに従ってアビケンナの表

記を捨てるが、ラテン語としてもイペリア半島における言語慣習からもこのvは唇歯音でないという理由で、アピセンナを用いた。

カーヌーンの日本語訳名を、訳者は前嶋信次先生と同じく『医学規典』としている。規典という言葉は耳慣れないが、一六世紀に復刻されたアラビア語原典の書名を見ると、*Kutub al-Qanun fi al-Tibb* (発音でなく文字の通りに表記、意味は「医学における規範の書物」となっており、『医学規典』という訳は、学問的にはもつとも正確であろう)。

私はこの書から教えられることばかりで批評する資格はないが、ただ一つ、『医学の歌』のヘブライ語訳者は *Mose Ibn Jibbon* となっているが、有名なヘブライ語訳者一家の三代目 *Moses ben Samuel ibn Tibbon* であろう。もちろん単なる誤植かも知れない。

(泉 彪之助)

〔草風館・東京都千代田区神田神保町三一一〇、電話〇三一一三二六二一一六〇一、平成十年十月、四六判、二八四頁、本体四、八〇〇円〕

リチャード・ゴードン著

『歴史は患者でつくられる』

本書を開くといきなり、「ジョージ・ワシントン」は厄介な歯に悩まされていた」という一行に出会う。あのアメリカ初代大統領が若いころから歯が抜け落ち、当時の不便な義歯にさ

んざん悩み抜いた話がつづられている。

ついで、英雄ナポレオンのカルテが出ている。アメーバ性膿瘍・砒素中毒・膀胱結石・胃癌・癩癩・痔・性機能不全症・マラリア・躁病・梅毒・結核静脈瘤などなど、その多彩ぶりに一驚させられる。そして、現代史を左右した政治家ヒトラー、スターリン、チャーチル、ルーズヴェルトたちの隠された病歴が語られ、世界の運命がそのためにいかに大きくゆがめられたかという戦慄すべき内幕が生々しく私たちの目の前につきつけられる。

著者は麻酔科を専門とする医師であったが、のちに文筆家として立ち、多くの著作を執筆し、映画化された作品もある。それだけに医学的には正確で、文章は躍動的である。

政治家、国王、女王の病歴について、文筆家たちとして、バイロン、ダイケンズ、ショーなどが取り上げられているが、イギリス人にかたより、日本人にはなじみの薄い人物が多い。その点、芸術家としてあげられている女優サラ・ベルナル、音楽家バガニーニ、画家ゴッホの頁は読みごたえがある。

美貌と美声の女優サラ・ベルナルは壞疽のため役者の生命ともいえるべき脚を切断する。その手術現場の様子が臨場感をもって再現されている。サラは義足で舞台上に立ったが、その後腹部手術を行い、さらに結石摘出の術後に尿毒症にかかって亡くなる。病気は人を選ばないのである。

画家ゴッホの精神病についてはよく知られているが、ここではゴッホとガッシュ医師との関係をくわしくたどり、彼の最